

井上奥本による 明治42年「余部町史稿」編纂

東 昇

1 地元の歴史への関心

井上奥本（1871～1933）は、「井上奥本家文書解題」（35頁）で記したように、余部町の町長代理・助役・区長・議員を勤め、また在野の国語学者として知られていた。しかし井上奥本家文書の整理を進めると、奥本は、井上家・地元余部・加佐郡・丹後の歴史にも関心を持ち、調査・研究していたことが判明した。そのなかで明治42年（1909）に奥本が編纂した「余部町史稿」（文書番号2014、以下同）は、この調査・研究の成果が盛り込まれており、史料紹介をかねて、内容とその後の明治45年「維新以前地方民政制度調査」への展開について述べたい。

2 明治42年「余部町史稿」の内容

明治42年「余部町史稿」は、稿本の名の通り、追加史料や加筆修正が多く、明治42年から開始しその後も継続し編纂している。内容は、①地理・歴史、②現勢状況、③高倉神社・雲門寺、④史料の4部構成である。

位置 舞鶴鎮守府所在地ナル餘部町ハ丹後国加佐郡ニアリ、四部落ニテナル
丹後（タニハノミチノシリ）丹後ハ続日本紀元明天皇和銅六年四月ノ条ニ、「割テ丹波ノ国五郡ヲ、始テ置ク丹後ノ国ヲ」トアルヲ元トス
加佐 加佐郡ハ上古與謝郡ト一ナリシモノ、如ク、全帝三十九年、天照大神ヲ大和笠縫邑ヨリ、丹波吉佐宮ニ遷シタル、当時豊受大神ト共ニ遷幸セラレシ、吉佐宮ナルモノ丹後ニ三所アリテ、其二所ハ加佐郡内ニアリ、而シテ正史ニ此郡名ニ顯ハレタルハ、日本書紀天武天皇白鳳五年九月ノ条ニ、「神官奏シテ曰ク、為メニ新嘗トフニ国郡ヲ也、齋忌（ユキ）ハ齋忌此云踰既、東左即チ尾張国ノ山田郡、次（スキ）ハ次此云須岐也、西右丹波国訶沙郡並ニ食リトニ」トアルヲ以テ、尤トモ古シトス

まず①地理・歴史では、余部町の位置からはじまり、丹後・加佐・余部の由来・歴史、地積・石高、私人（村の旧家）である。丹後では、「続日本紀」から和銅6年（713）の丹後分国を記し、加佐では「日本書紀」から、白鳳5年（665）新嘗の主基国となった丹後国訶沙郡を引用している。余部では、「和名類聚抄」を引用し、加佐郡十郷について私見を述べる。

地積 正応田数帳（丹後国田数目録トモ称シ）ハ、鎌倉幕府ノトキ、即チ正応元年ノ但馬ノ太田文（太田文トハ弘安八年、鎌倉幕府ノ命ニヨリ、但馬ノ太田太郎左衛門尉政頼太田文ヲ注進ス、其書ハ守護人大江某署名之後世ニ伝播スト云フモノコレナリ）ヲ本トシテ百七十年ノ後長祿三年ニ、其庄郷里保ノ下地田数及ビ知行人ヲ檢注シタルモノナリ、之ニ加佐郡、倉橋郷、百六十七町七反

百八町一反七十五歩、領家延永左京亮
二十七町九反八十三歩、興保呂 小倉筑後守
三十一町六反二百二歩、地頭 小野寺
餘部里六十町八反二百九歩、鹿王院
大内庄九十七町二反三反歩、三上江州
田辺郷百九十九町五反二歩、細川讃州

トアリ、此餘部ハ餘部上、餘部下、長和ノ四部落ヲ指シタルモノニシテ、現今餘部上ニ天龍寺鹿王院末ナル雲門寺アリテ、開山ハ普明国師ナリ、且ツ其寺記ニモ、餘戸ハ鹿王院古領ナリシ由ヲ記サレアリト云フ（出雲風土記ニ曰ク、「意宇郡餘戸里、郡家正東六里二百六十歩、依神龜四年編戸天平里、元來里故云餘戸、他郡且如之」）

石高 元祿九年六月、奉行ヘ差出セル、古文書土目録ニ依ルニ

二百七十四石九斗五升、和田村
百九十七石七斗八升一合、長濱村
三百六十石三斗、余部下村
二百九十四石七斗一升、余部上村

トアリテ、當時余部上ハ拾五軒ト記サレタリ、以テ他部落ヲモ類推スベシ

私人 余部上井上家ノ古記ニハ、十一世前ノ祖ハ、天和元年亡トアリテ、今ヨリ二百二十八年前ニ当ル、當時ノ余戸上ハ瀬野、井上、上野、高橋、布川ノ五姓ナリシト

地積では「正応田数帳（丹後国田数目録トモ称シ）」を引用しているが、その基になったと思われる「丹後国諸庄郷保総田数帳目録」（2026）が現存する。石高では「元祿九年六月、奉行ヘ差出セル、古文書土目録ニ依」とあり、井上家所蔵の「土目録」（821、2530）を典拠としている。私人でも、井上家の古記を引用し、11世前の祖が天和元年（1681）亡とあり、現在（明治42年）から228年前としている。そして当時の余部上には、瀬野、井上、上野、高橋、布川の5姓があったとする。この古記年代と、井上家歴代を記した「〔先祖戒名調〕」（3199）の、初代七右衛門の死去年が一致している。

劇場 歌舞伎座三六・八、余部座三五・三、寿亭

神社 高倉社（中古山上ヨリ下シ、天正年間若狭高濱ノ城主逸見駿河守、当町附近ヲ占領シ、其臣岡本某ナルモノ、宝殿ヲ新造セリ） 若宮社、稻荷社、村社一、無格七、計八

寺院 雲門寺、長江寺（貞観年中、慈覚大師立）、計二

教会 東本願寺、西本願寺、浄土宗、天理教、金光教、日蓮宗、曹洞宗

座廊 賀津良

学校 第一、第二

温泉 薬師

古木

警察 出張所二

郵便 受取所、郵便局

憲兵屯所

海軍地墓 三千坪、三十三年

市街計画 〈三十一年八月ヨリ三十二年三月迄、費額〉

交通 〈エノキ七万円、道芝三十五万円〉、惣計百万五千円、〈三十四年一月着、三十五年七月成〉

銀行 高木、多可

病院一、出張所一、医師七

つぎに余部町の②現勢状況、劇場・神社・寺院・教会・座廓・学校・温泉・警察・郵便・憲兵屯所・海軍地墓・市街計画・交通・銀行・病院の項目である。第1、2小学校や劇場・銀行・病院など、当時の発展する余部町の様子を記す。また市街計画に31年8月～32年3月と開発年代があり、発展の経過を歴史として付記し、現在の余部町も記録している。

一高倉神社祭神（村社）、中誉田別命、〈左春日大神、右天満天神〉

一天正年間、若狭高濱城主逸見駿河守、餘部町附近ヲ占領シタルトキ、其臣同国和田ノ城士岡本主馬ノ助、餘戸ノ地ヲ領シ、社地一町六反アリシヲ取り上げ、終ニ田畑一反余ヲ残セシ旨、天正十二年ノ社領書ニ有リ、其頃宝殿ヲ新営セリト〈旧諸書ニ曰、慶長五年七月小野木兵乱ノ節、玄旨ヨリ田井・成生へ廻状ノ宛名岡本新兵衛殿書之、天正十二ヨリ慶長五迄十七年〉

一全社棟札ノ文ニ曰ク、天文六年丁酉十月十四日、願主南部修理亮源膳行、〈全書ニ曰、（余部下、佐波賀、田中村ニカカル文）、南部門主伊賀ニ預ケラル云々、従五位橘氏親、鳥羽弥三郎榮秀、下代小林伊賀守行忠、（天文六ヨリ天正十二迄四十八年目）〉

一全壺枚、文政五年八月七日、阿遮（闍）梨法師諦寛代〈泉源寺智往院住職カ〉

一祭神、誉田別尊、天兒屋根命、菅原道真公

一全社宝物、高麗犬壺対〈備前壺焼、慶長十四年八月十五日ト銘有〉

一全社額、「高倉八幡宮」、宝暦甲戌年二月〈旧語集曰、貞享二年境谷村天神の額を、持明院基時御筆、貞享二ヨリ宝暦四戌迄七十年〉、左近衛権中将藤宗時書（持明院書）右添翰、宝暦四甲戌二月正四位上（牧野カ）豊前守狛近任（書判）

一全社文書、天正十二甲申八月吉日、岡本主馬之助之幸

余部六ヶ村百姓中

そして③高倉神社では、祭神・歴史・宝物を記しているが、「天正十二年ノ社領書」や棟札、額など資料名と概要をあげている。雲門寺については、まず『国史大辞典』の春屋妙葩の解説や、「普明録摘記」の「雲門寺偶伉」を全文引用する。この『国史大辞典』は八代国治他編、吉川弘文館が明治41年に刊行したもので、大正8年「蔵書目録」（2016）にも記され、最新の情報を取り入れていたことがわかる。

余戸之内長濱八幡宮へ寄進書

合田壺段者 壺（所ハ濱中）

合畠式百四拾五歩者 壺所ハ池尻ニ壺（所ハ）

右之田畠者拙者に永代被下領知之内たりといへとも八幡宮へ寄進申候、然上者社之修理神事等之御供已下無由断可被執行事専一候、子々孫々異儀有間敷候、仍寄進状如件

天正十二甲申八月吉日

岡本主馬助

元幸（花押）

余戸六ヶ村

百姓中

(裏書) 岡本主馬寄進之通得御意候処、神方之事二候間以檢地之上壘段五十歩任寄進
状之旨不可有相違由二候間可得其意者也

慶長三年

十月二十二日

里夕(花押)

高倉神社所蔵棟札

(表) 願主南部修理亮源膳行

鳥羽弥三郎栄秀

下代小林伊賀守行忠

奉造立丹州加佐郡余戸里高倉八幡宮武運長久子孫繁昌所也敬白

従五位橘氏親 天文六年丁酉十月十四日

(裏) 高濱

大工 三郎左衛門尉

上林

太郎次郎

高倉神社所蔵棟札

峯正徳五乙未歳 大工朝代町

林田與三左衛門房昌

奉建立高蔵八幡宮余戸里六ヶ村氏子中敬白

五月吉祥日

長濱村肝煎

江上太郎左衛門

(裏)

大工東梁朝代町

林田與三左衛門房昌

同 傳之亟 房章

全社所蔵備前焼高麗狗銘

あこ前二おき

びせんつほやき衆

きしん仕申候也

慶長十八年

八月十五日

④史料では、本文・改行など形態を維持しながら、出典、註釈とともに掲載する。収載しているのは、応安3年(1370)春屋妙葩の寄進状、天正12年(1584)岡本主馬ノ介の長浜八幡宮寄進書と慶長2年(1597)の寄進書裏書、高倉神社所蔵の天文6年(1537)、正徳5年(1715)の棟札、舞鶴市指定文化財の高倉神社の慶長18年の狛犬銘文、元禄13年(1700)井上清兵衛の弓印可状である。おそらく現地で原文書を確認し筆写したと考えられる。また弓印可状は、井上家所蔵の「射術皆伝巻物」8巻(3156～3163)であり、「土目録」と同じく自家所蔵の史料も利用している。挟み込みの文書には『国文論纂』の「定使」の項目を頁数も含めて引用しており、徹底した調査・研究手法であった。この「余部町史稿」は、余部の歴史を各種資料から実証する基礎作業であると同時に、鎮守府開設に伴い急激に変化する郷土余部の歴史・現在を残したいという思いから執筆した可能性がある。

3 明治45年「維新以前地方民政制度調査」への参加

その後、奥本の「余部町史稿」編纂が活かされたのが、明治45年京都府が編纂した「維新以前地方民政制度調査」である。この調査は、京都府が明治44～45年にかけて実施した、維新以前の民政自治制度に関する事業で、日露戦争後の地方改良運動の一環として行われた（『京都府立総合資料館所蔵文書解題』改訂増補、1993）。加佐郡は町村単位で現存し、各項目は詳細で史料本文の引用も多い。

この調査結果を余部町で出版したものが、明治45年4月「維新以前地方民政制度沿革及事蹟調査書」（2333）である。本調査書は、調査委員井上奥本、前田史郎、土井禎吉、亀井新太郎とあり、なかでも「本誌ハ専ラ井上奥本、前田史郎、両氏ノ調査ニ係ルモノナリ」とあることから、奥本が調査の中心人物であった。

内容をみていくと「町名ノ起源」では、余部の地名が全国100カ所以上あることなど「余部町史稿」にはない記述があり、「余部調書」（1997）などを引用している。「習慣恒例」には、文化10年「作方年中行事」（2043、翻刻①）を用い、概略をまとめている。附録の1余戸之内長濱八幡宮へ寄進書、3応安3年（1370）春屋妙葩の寄進状は「余部町史稿」と同じ史料、2文化11年2月「幾利死丹宗門御改帳」（1419）は井上家文書、そして4明治11年瀬野りつ貞節褒賞の明治期の史料が掲載される。また奥本は、関連する資料として、加佐郡内の「維新以前民政制度沿革及事蹟調査」を収集しており、東雲村、丸八江村、有路上村、岡田下村、西大浦村、朝来村分（2360～2363）が現存している。

この後、奥本は、大正14年4月16日「丹後田邊在々高書帳」（2009）などを写し、丹後全体に関する大正15年2月「丹後志資料」（2358）をまとめる。余部に関しては、大正15年6月「郷土史料」（2357）として、雲門寺縁起概要、余部下村誌、瀬野りつ女、丹後一色氏年譜などを収載する。また大正13年頃編纂の「家名変遷表」（2046）は、明治15年改正戸番号を基準に、余部上村52軒分の家名（屋号）の変遷（明治、安政、文化、宝暦）をまとめている。元禄前後より大正13年までの約250年間を掲載するとあり、その典拠として「当村保存ノ高帳・宗門帳及ビ雲門寺保存ノ過去帳」を調査した、しかし誤脱があるので後日の訂正を待つと記している。ここから、奥本は自家や村内の近世文書、雲門寺の過去帳など、資料に基づいた調査方法に徹していたことがうかがえる。

他にも、明治35年7月「丹州三家物語」（2019）、明治41年3月「丹後旧事記」（2010）などの写本も存在し、後にこれらを集大成した『丹後史料叢書』を編纂する、京丹後大宮の郷土史家永浜宇平との関連や、同時期に郷土史を研究した人々との交流などが考えられる（京丹後市教育委員会編『丹後が生んだ偉大な郷土史家』永浜宇平の生涯1.2、2011.2012）。なお、永浜宇平は「宮津町の母体に就いて」（2343）という論考を、奥本へ贈呈している。また明治43年5月7日歴史地理学者吉田東伍からの書簡（3145）に、丹後田数目録は近年「改定史籍集覧」に編入された、友人が写本を所持しているなどの情報を得ている。このように国語学の研究と同じく、全国の学者との交流なども想定できる。今後は井上奥本家文書をはじめ、関連資料を調査することにより、井上奥本の郷土調査・研究について分析を進めていきたい。

表紙の解説

	1	2	3
5		4	
(裏)		(表)	

- 1 「舞鶴の歴史アラカルト」パンフレット
- 2 文書蔵出し調査風景 東昇撮影
- 3 舞鶴地方史研究会との共同調査 東昇撮影
- 4 舞鶴クレインブリッジ 松岡秀雄氏撮影
- 5 東舞鶴高校での授業風景 廣瀬邦彦氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書（2008～）

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山域の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 八幡・南山城地域の寺院資料と信仰—京都府歴史資料調査—
- 11 舞鶴の文化遺産と活用
- 12 「丹後の海」の歴史と文化
- 13 古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究
- 14 舞鶴・京丹後地域の文化遺産
- 15 沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊



京都府立大学文化遺産叢書 第16集
舞鶴の地域連携と世代間交流
井上奥本家文書調査報告

編集 東 昇
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2019年3月30日
印刷